

東アジアのミラクルワールドへようこそ

——シンポジウムの開催に当たって——

二〇〇〇年代に入ったいま、文学をめぐる状況はさらに混迷を深め、文学の周縁化、若者の文学離れを嘆く声が高まっている。少なくとも、狭い意味での文学（純文学や大衆文学）だけを語る意味が薄れてきているのは確かだ。

しかし、若者が文学作品を読まない訳ではない。例えば日本では、村上春樹の『1Q84』が三巻で400万部以上を売り上げている。中国に目を向けても、余華の長編『兄弟』は35万部を売っている。純文学に限らず、ライトノベルに範囲を拡げれば、もっと読まれている作家や作品が目白押しである。日本では、谷川流の『涼宮ハルヒの驚愕』（上下）の売り上げが初版だけで100万部を越えた。現在9巻まで出ているシリーズ全体では1700万部を超える。中国でも、郭敬明の長編ファンタジー『幻城』が200万部、青春群像を描いた『小時代 1.0』『小時代 2.0』がそれぞれ100万部を売っている。

アニメ・マンガの人気はさらにすごい。そうした傾向は、コスプレや二次創作などの同人活動の隆盛とも強く結びついている。

こうした現象は何を物語っているのだろうか。わたしは文学をとりまく環境に、いくつかの次元で大きな変化が起こっているのではないかと考えている。まず、若者のテキストの読み方がこれまでと異なって来ている。それと同時に、読者が作品を読むことをとおして期待するものも変化してきている。さらに言えば、そうしたキャラクターへの関心や、作品に求めるものの変化の背景には、若者のある種の孤独感や虚無感、閉塞感、あるいは社会との乖離感（社会に参画できるという思いの欠如といってもよい）がある。

そうした関心から、わたしは東アジアの五つの都市、北京、上海、香港、台北、シンガポールで、村上春樹の作品と、漫画・アニメ・ライトノベルの受容、ならびに同人活動への参加についてフィールド調査を行った。

今回のシンポジウムでは、その調査の報告を行うとともに、各領域の専門家から、現在の若者創作、同人活動をめぐる状況について報告を受ける。それらを通じて、いま東アジアの諸都市で起こりつつある大きな変化の実相を垣間見ることができるはずである。

2012年3月

早稲田大学文学学術院

千野拓政